

## 佛光人の配った暖かいうどんが気仙沼の被災者に喜ばれる

【人間社記者心微宮城県報導】 2011/3/31

NPO 法人災害危機管理 SYSTEM EARTH 石原顯正理事長（日蓮宗立本寺住持）、小林康洋理事長の依頼の下、東京佛光山寺住持覚用法師は覚耀法師、如昱法師と共に、新宿分会簡麗娟会長、埼玉分会廣田貞子会長及び、幹部・会員計17人が31日午前7時に、百数箱の新鮮なパン、野菜、果物を持って宮城県気仙沼市東陵高等学校に向かった。この学校には200人近い避難民の方々がいるが、佛光会員は日本人に人気のある「味噌うどん」を作った。冬の寒冷の中、佛光人は仏号を心で念じながら、温かいうどんを一碗一碗被災者の方々の手に渡しました。皆さん、「久しぶりに温まった」と法師や会員にお礼を言い続けていた。

91歳の小野寺長次郎さんと85歳の妻、小野寺ハシメさんは、息子さんを今回の災害で亡くされ、人生を暗くしていた。覚用法師は夫妻を慰め「人はまた生まれ変わることができる」ことを話した。長次郎さんの目は一瞬明るくなり、暗かった表情も穏やかになった。そして津波が襲ってきた時の情景を話してくれた。その時海水は既に腰まで達し、年を取った妻は懸命に階段に登った。長次郎さんも必死で梯子につかまった。最終的にお孫さんに発見され、二人とも脱出することができた。

68歳の佐藤健児さんご夫妻は、避難所で温かい麺が食べられ、とても感動したそうである。手に念誦をかけて、安心してもらった。法師は名刺を渡し、皆さんが東京に来る機会があったら是非お寺を訪問して下さい、いつでも歓迎いたしますと述べた。

今後の学校方面の交流においては、覚用法師は南華大学で被災者子女に学習の場を提供することを告げ、また当座の学習資金のために日本円で30万円の奨学金を提供し、それを副校長上村広務先生に代表として渡してきた。

最後に奈須野明宏先生と共に皆さんは佛光人たちに深々とお辞儀をし、一斉に「台湾人一番！今日のうどんも一番」と言ってくれたのだった。

